

「介護過程」における科目間連携の「見える化」による検討と今後の課題 — 2012年度本学介護福祉学科FD活動報告 —

Consideration by ‘visualization’ of the cooperation between the subjects of
‘Care Process’ and challenges of the activities for FD
—Report on the activities for FD of department for training of certified care
workers in Matsumoto Junior College in fiscal 2012—

福田 明
Akira FUKUDA

尾台 安子
Yasuko ODAI

釜土 禮子
Reiko KAMADO

丸山 順子
Junko MARUYAMA

合津 千香
Chika GOZU

赤沢 昌子
Masako AKAZAWA

齋藤 真木
Maki SAITO

小坂 みづほ
Mizuho KOSAKA

要旨

本学では、各学科でFD活動に取り組み、その成果を年1回のFD活動報告会で報告している。本稿は、2012年度本学介護福祉学科FD活動報告書である。

2012年度、介護福祉学科ではFD活動を通して、まず、教員自身が「科目間連携」を意識することを目的にした。そこで、カリキュラムのなかでも他の科目同士をつなぐ重要な役割を果たす「介護過程」4科目をとりあげ、それらが他の科目とどう関係しているのかについて「見える化」して検討した。

その結果、①「介護過程」についてすでに連携している科目に加え、さらに連携が必要と思われる科目の確認と新たな気づきにつながる、②「介護実習」を核に「介護過程」と他科目との連携を促進することが重要で、そのためには、カリキュラム・マップとして示し、学生の学習支援の一環につなげることが必要である、③教員には、学生がもつ知識・技術をつなぐファシリテーター（facilitator）としての役割もある、といった示唆を得ることができた。

今後の課題として、①「介護過程」における科目間連携に加え、他科目における科目間連携についても検討していく必要性、②本FD活動を通して作成した「介護実習」を核とした科目間連携マップは、カリキュラム・マップとして考えた場合、まだ発展途上であるため、「介護福祉学科カリキュラム・マップ」へと発展させていく必要性、③「介護実習」での学生の学びをどう授業に反映させるのか、他の科目との連携のなかでさらに検討・実践していく必要性、があげられた。

Key Words：FD活動、「介護過程」、科目間連携、「見える化」

I. 背景と目的

本学では、FD活動の一環として補注1)、2011（平成23）年度より各学科でFD活動に取り組み、その成果を年1回のFD活動報告会で報告している。

2011（平成23）年12月7日に行われたFD活動報告会において、介護福祉学科では「障害者の外出支援体験学習」の取り組みについて報告した。この取り組みを通して、体験学習での気づきや学びを深めるためには、さらなる科目間連携の必要性・重要性が指摘された1)。このことを受けて、2012（平成24）年度のFD活動では、科目間連携について検討することになった。科目間連携の重要性について加戸（2009）は「教員はこれまで互いの立場を尊重するあまり、お互いの教育内容を協議する等の連携が少なかったのではなかろうか」と述べた上で、科目

間連携は教育の質を高め、学生の確実な成長を保証するという点からも、今後改善を進めるべき事項であると指摘している2)。

介護福祉学科では、以前より科目間連携の必要性がとりあげられており、教育内容の重複や時期的な問題を解決・緩和するために、全科目の授業内容を一覧表にしてきた。しかし、それが有効的に機能してきたとは言い難く、参考程度に終わってしまっていた。そこで、ちょうどよい時期と考え、すべての科目において何らかの関連性がある「介護過程」についての科目間連携を検討することにした。

また、益田・牧野（2008）によると、学生が効率よく学習するためには、関連の強い科目同士を事前に意識し、専門知識を修得していくことが重要で、科目間連携を促進するためには、教員が学生に対し

てよりわかりやすい情報を提供する必要があると指摘している³⁾。ここでいう「よりわかりやすい情報提供」とは、カリキュラムを学生に示す際、ただ科目を羅列するのではなく、各科目がそれぞれどう連携しているのか、目で見てわかるように可視化、つまり「見える化」することを意味している。したがって、「科目間連携」には「事前の意識化」が必要であり、その推進方法として「よりわかりやすい情報提供」が求められるのである。

そこで、本FD活動では、次の2点を目的とした。第1は、まず教員自身が「科目間連携」を意識するため、「介護過程」をとりあげ、それが他のどの科目とどう関係しているのかについて「見える化」を通して整理し、今後の課題を検討することである。第2は、今回の取り組みの成果を、今後、学生に対してわかりやすい形で情報提供し、科目間連携の促進に向けて活かす基礎資料とすることである。

Ⅱ. 用語の説明－介護過程－

介護福祉士養成教育は、2009（平成21）年に新カリキュラムとなり「介護過程」150時間が新たに導入された。この「介護過程」の展開こそが介護福祉士の専門性を打ち出すものである。「介護過程」の展開の意義としては、①専門的かつ科学的な方法

によって生活上の課題（生活課題）を明確化し、解決につなげていく、②生活課題の明確化や目標設定により目標志向型の介護が展開できる、③評価することにより利用者の満足度や介護の質を客観的に判断できる、④経験や勘等による個々で異なる介護ではなく、介護の質が保証できる、⑤生活支援技術の知識や経験の質を高めて方法論の体系化に役立つ、等があげられる。

図1に示すように「介護過程」とは、①利用者との出会いから始まり→②アセスメント（利用者・家族・関係者等からの情報収集→情報の整理・統合・解釈→生活課題の見出し）→③生活課題に基づくケアプラン作成→④ケアプランに基づく介護実践→⑤介護実践の評価……という一定の手続きに則った支援の流れを意味する。逆にいえば、介護実践の質はケアプランの内容に、ケアプランの質はアセスメントの内容に影響されることになる。それだけに、アセスメントの際は、利用者の思い、疾病・障害の状態、日常生活動作、社会参加状況、生活歴、生活場所の状況等、ICF（国際生活機能分類）^{補注2)}に基づき、その人に関係する多くの情報を得られるかどうか、そしてその得られた情報を結び付けて生活課題を見出せるかどうか、ということが重要になってくる。

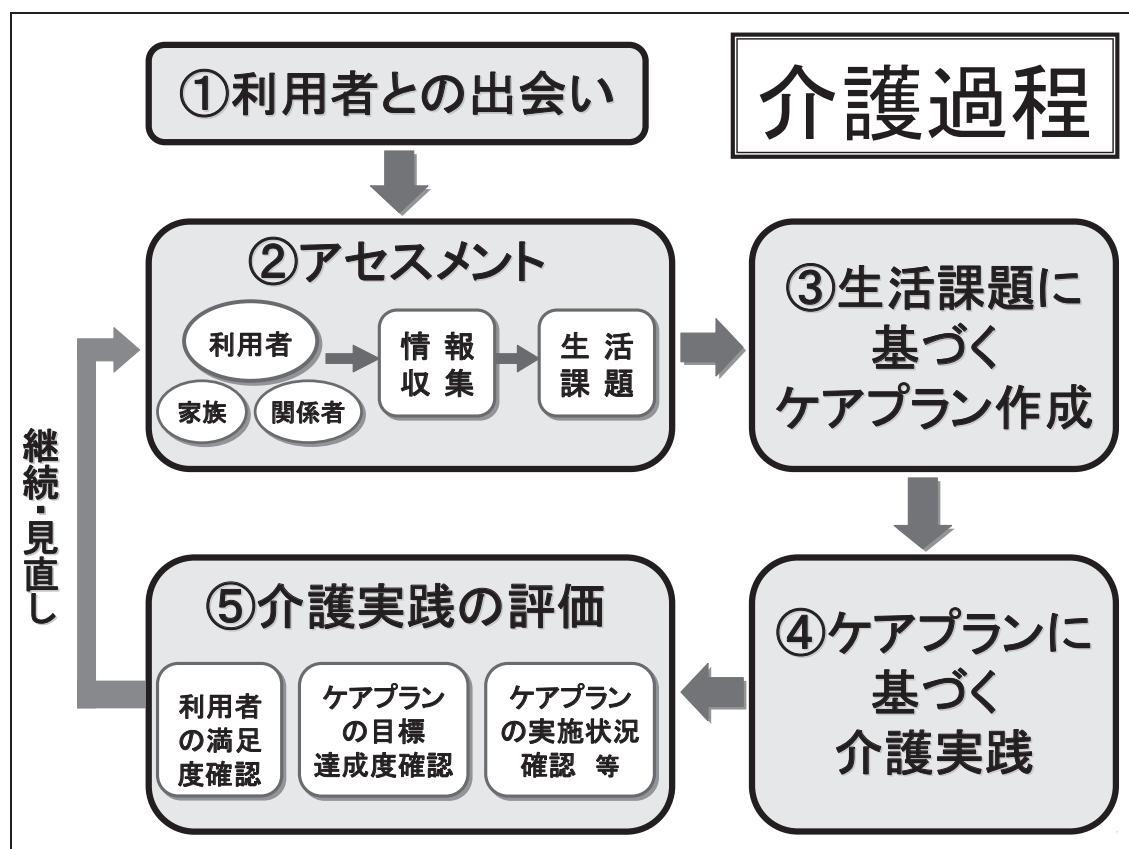


図1 「介護過程」とは何か

Ⅲ. 対象と方法

1. 対象

本FD活動では、本学で開講している「介護過程総論」「介護過程展開論Ⅰ」「介護過程展開論Ⅱ」「介護過程展開論Ⅲ」の「介護過程」4科目を対象にした。

図2は、「介護過程」4科目における学びの対象とその流れを示したものである。まず、1年前期で「介護過程総論」を学び、これを受ける形で1年後

期から各論に入っていく。具体的には、1年後期の「介護過程展開論Ⅰ」で運動機能障害（肢体不自由）のある人への介護過程を、続く2年前期の「介護過程展開論Ⅱ」では認知症のある人・精神障害のある人への介護過程を、2年後期の「介護過程展開論Ⅲ」では視覚障害や聴覚障害等の感覚機能障害のある人への介護過程を学んでいくことになる。

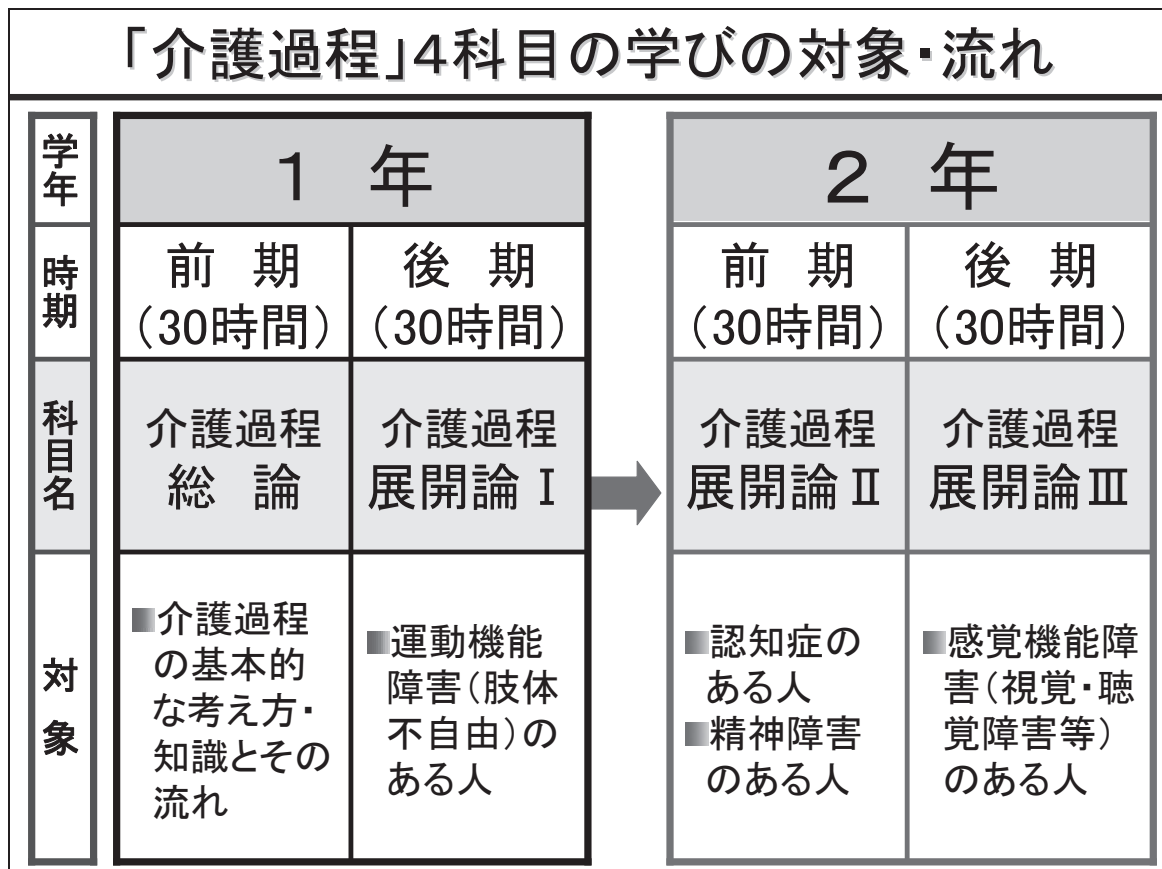


図2 「介護過程」4科目における学びの対象とその流れ

2. 方法

1) 「見える化」による検討

人は生きる上で必要な情報の80%以上を視覚から得ている⁴⁾。しかし、人はわかりにくい情報については敬遠し、自分にとってわかりやすい情報を得る傾向にある。例えば、日常的な会話であれば指文字等でも理解できる聴覚障害学生であっても、授業における専門的内容になると指文字等で示されても「わかりにくい」という。そこで、筑波技術大学では、専門用語や人名等をキーワードとして手話通訳者の映像に重ねて表示することで、授業における聴覚障害学生の理解を助ける試みを行い、効果をあげている⁵⁾。この事例からも、「見える化」の重要性が理解できる。

また、平野(2008)によると、「見える化」は、

それ自体が全てでなく入り口であるとした上で、図3のように「見える化」は、①「行動」→②「気づき」→③「思考」→④「対話」……という連鎖をもたらすと指摘している⁶⁾。そこで、本FD活動では、この「見える化」の連鎖を重視し、「見える化」自体を分析枠組みとして採用した。つまり、本FD活動では、「介護過程」4科目を対象に、それらの科目の「見える化」に取り組み（「行動」）→そこからの「気づき」→「思考」→「対話」の内容を大切にしながら、科目間連携について検討していった。

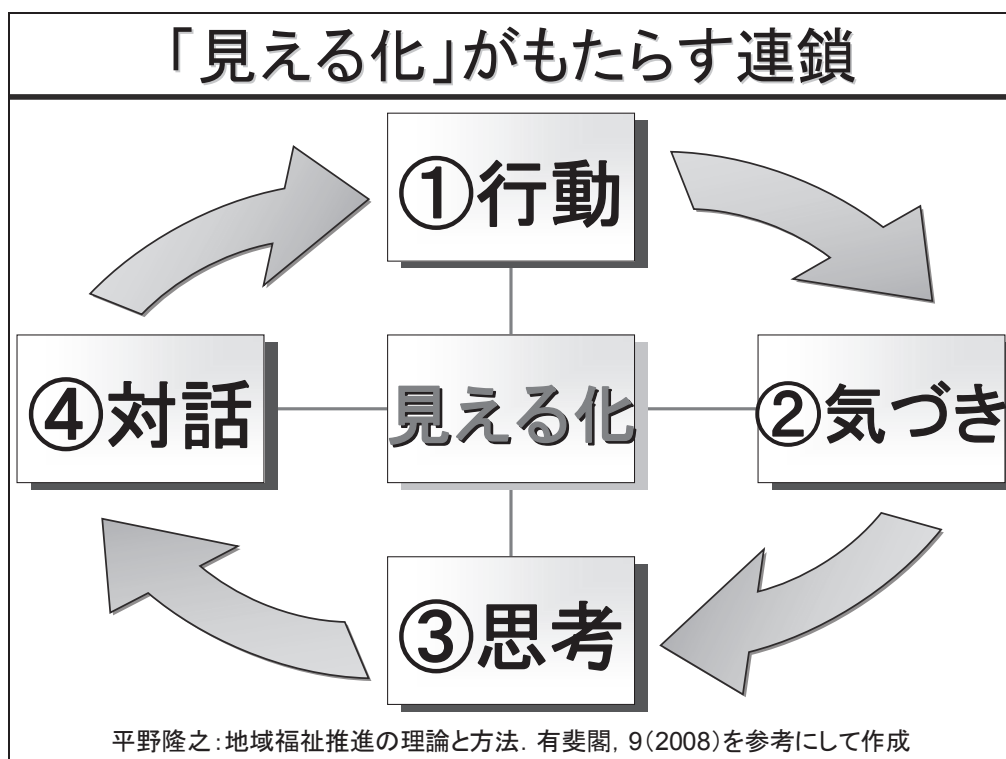


図3 「見える化」がもたらす連鎖

2) 本FD活動の取り組み手順

本FD活動は、図4に示すとおり、次の①→⑦の順に取り組まれた。①まず、5月16日のテーマ検討から始まり、②6月27日には「介護過程における科目間連携」をテーマにすることが決定した。③その後、教員8人が2人1組のペアにわかれ、それぞれグループワークに取り組んだ。具体的には、「介護過程」4科目における科目間連携の状況について、ペアごとに「見える化」に取り組んだ（この詳細は

後述する）。④7月25日には、各グループワークの成果を報告し合い、教員間での議論を深める勉強会を行った。⑤8月8日には、この議論を踏まえた上で、学科内で本学FD活動報告会に向けたプレ報告会を行った。⑥そして9月5日の本学FD活動報告会では、プレ報告会での意見を参考にして一部修正した内容を発表した（報告者：福田 明助教）。⑦以上を踏まえ、11月7日から本FD活動の報告書作成に入った。なお、本稿は、⑦の報告書にあたる。

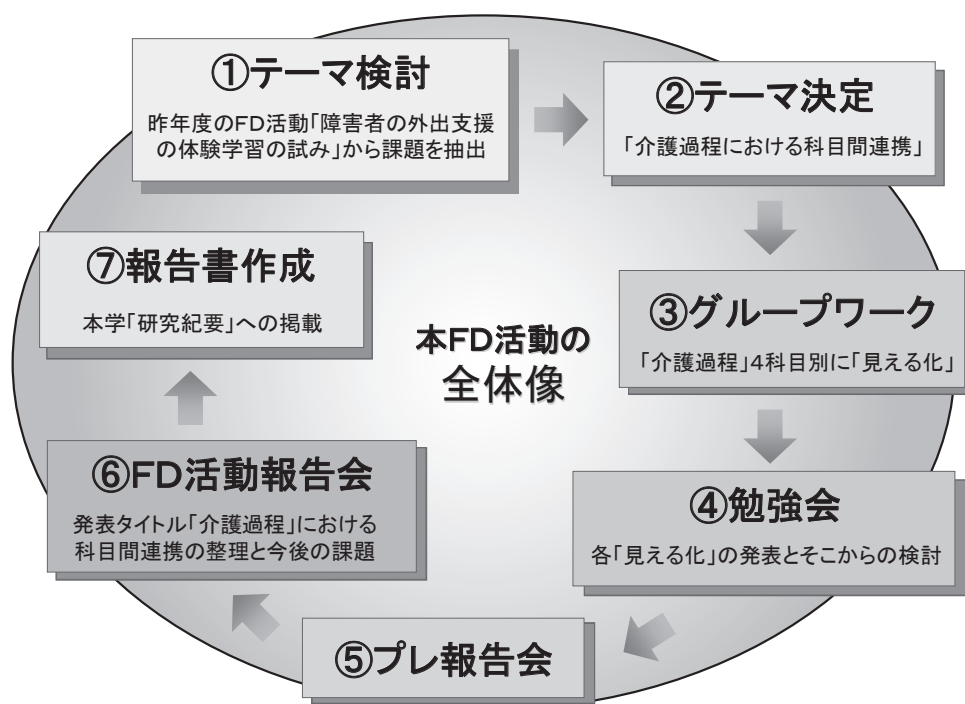


図4 本FD活動の全体像

IV. 結果

ここでは、本FD活動の「見える化」の成果である図を示しつつ（「行動」）、その図を見て学科内で話し合われた「気づき」→「思考」→「対話」の内容を述べていく。

1. 「介護過程総論」と「介護過程展開論Ⅰ～Ⅲ」との関係

まず、図5の「介護過程総論」と「介護過程展開論Ⅰ～Ⅲ」との関係を示す。この図からもわかるとおり、「介護過程総論」が土台になって、「介護過程展開論Ⅰ」「介護過程展開論Ⅱ」そして「介護過程展開論Ⅲ」へとつながっている。

次に、図5からの「気づき」→「思考」→「対話」

の内容を示す。「介護過程総論」は1年前期に学ぶ。そのため、「ICF」「アセスメント」等、はじめて聞く専門用語に戸惑う学生もいると思われる。加えて、事例の利用者だと、自分が関わったことのない紙面上の「人」であるため、学生はその「人」やその「人」への介護実践を想像しにくく、評価しづらいことが考えられる。つまり、学生自らが実習に行き、実際に受け持ち利用者を決め、介護過程を展開してみないと、「そもそも介護過程とは何か」を理解しにくいのではないか。その意味では、介護過程を展開する実習が2年からだが、1年から導入するのも手ではなかろうか。1つの検討課題として浮かび上がったといえる。

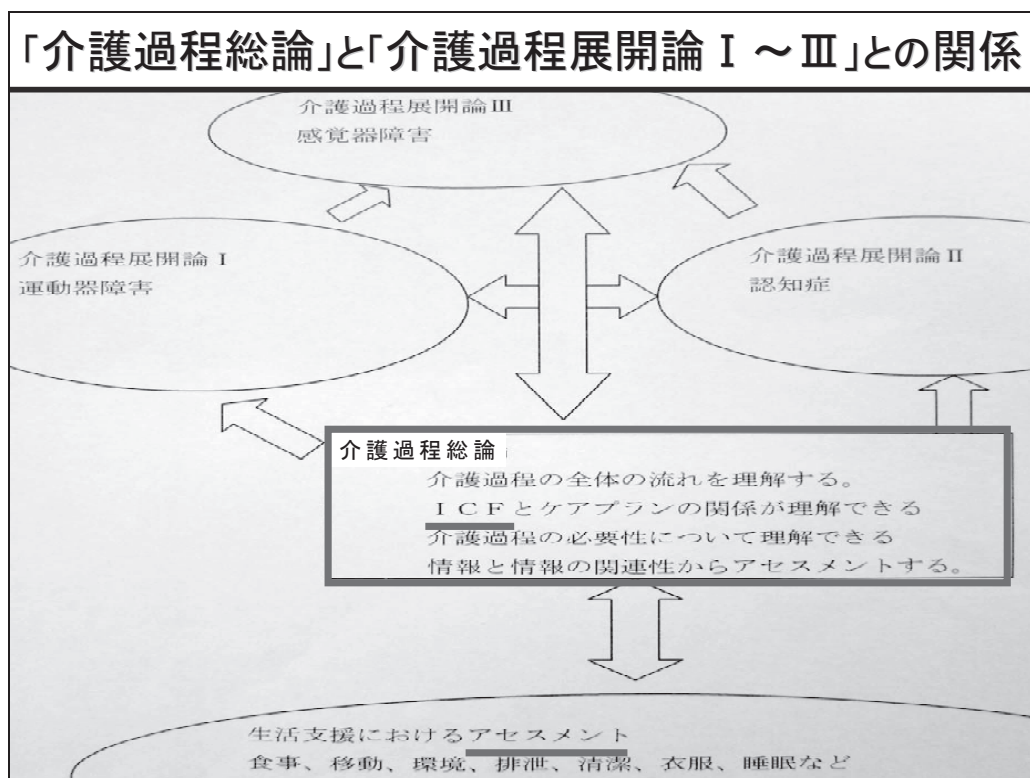


図5 「介護過程総論」と「介護過程展開論Ⅰ～Ⅲ」との関係

2. 「介護過程展開論Ⅱ」からみた科目間連携の状況

まず、図6の「介護過程展開論Ⅱ」からみた科目間連携の状況を示す。太線で示した「認知症援助論」「認知症総論」等は関連が強い。それに対して、点線で示した「介護福祉対象論」「障害の理解Ⅱ」等は関連が弱いことがわかる。

次に、図6からの「気づき」→「思考」→「対話」の内容を示す。学びの対象の関係上、「認知症総論」「認知症援助論」との関係が強い。一方で、精神障害のある人も対象に含まれているのにもかかわらず、彼(女)らの置かれている状況や生活のしづらさ、法律的な側面等、十分に教育できているとはいえない。それが、「介護福祉対象論」「障害の理解Ⅱ」との関連の弱さにつながっている。数は少ないが、病

院に就職して精神障害のある人と関わっている卒業生もいるし、今後もそういう進路を選択する学生もいると予測される。したがって、認知症のある人だけでなく、精神障害のある人についても、その教育の不足分を補っていくことが求められる。

「介護過程展開論Ⅱ」では、2年の6月（17日間）に行われた実習での学びも参考に、認知症の利用者役、介護者役等に分かれてロールプレイを行う。そして、それを他の学生がみて評価し、評価の視点と方法を学んでいく。その意味では、前述した「介護過程総論」の弱みであった評価に関する教育をカバーできていると思われる。こうした科目間連携がうまく機能している側面を各教員が知り、今後の授業に役立てることが重要である。

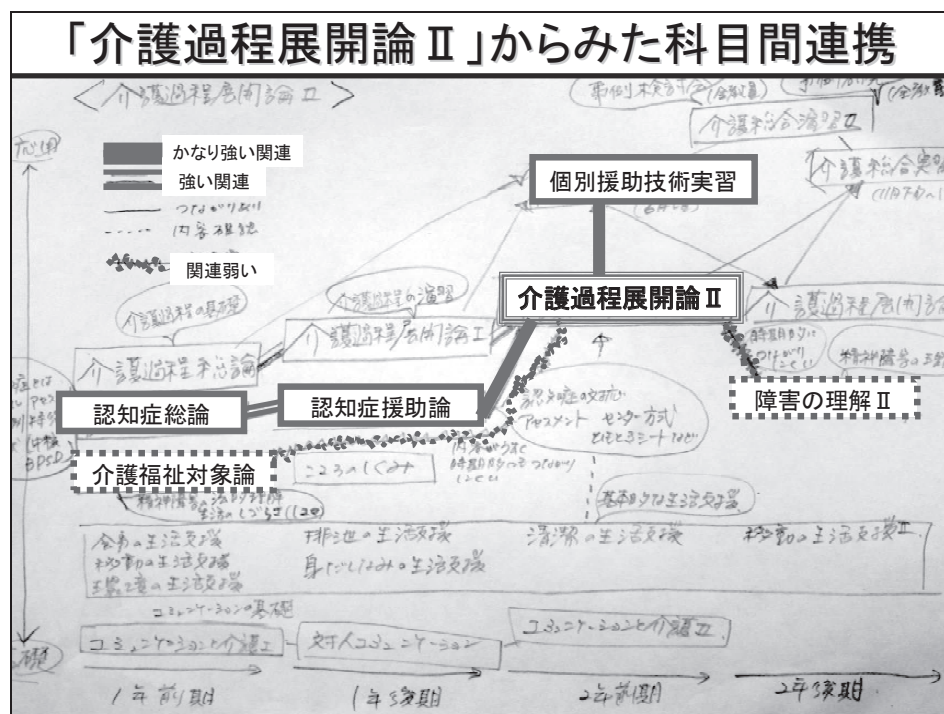


図6 「介護過程展開論Ⅱ」からみた科目間連携の状況

3. 「介護過程展開論Ⅲ」からみた科目間連携の状況

まず、図7の「介護過程展開論Ⅲ」からみた科目間連携の状況を示す。1年前期の「コミュニケーションと介護Ⅰ」と2年前期の「コミュニケーションと介護Ⅱ」を受ける形で「介護過程展開論Ⅲ」があることがわかる。

次に、図7からの「気づき」→「思考」→「対話」の内容を示す。聴覚言語障害や視覚障害はコミュニケーション障害ともいえ、「コミュニケーションと介護Ⅰ・Ⅱ」等との関係が強くなっている。その意

味で、「コミュニケーションと介護Ⅰ・Ⅱ」で学ぶ内容を「介護過程展開論Ⅲ」につなげる取り組みが大切になる。

また、授業では「視覚障害のある人へのガイドヘルプ（演習）」も行うため、この図には示していないが、「移動の生活支援Ⅱ」とも連携していく必要がある。

2年の6月（17日間）に行われた実習で、学生は受け持ち利用者に対して実際に介護過程を展開している。「介護過程展開論Ⅲ」は2年後期から始まる

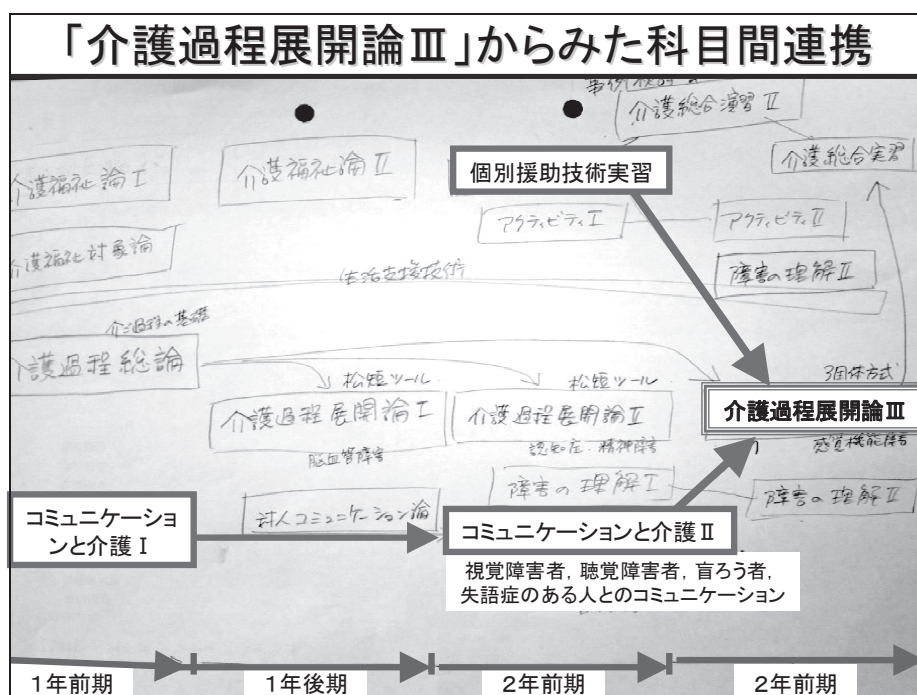


図7 「介護過程展開論Ⅲ」からみた科目間連携の状況

ため、学生によっては、ようやく「介護過程とは何か」の理解ができた人もいると思われる。なかには介護過程の学習が相当進んできたと思わせる人もいる。確かに学生によって介護過程に関する理解度は異なってくるものの、ゼロからスタートするよりは理解しやすいのではないか。その意味で、単に科目の内容だけにとらわれるのではなく、どの科目をいつ開講するか、といった時期の検討もさらに重要になってくるといえる。

4. 「介護過程展開論Ⅰ」等で用いる学科共通事例とその工夫

今度は、介護福祉学科教員により作成された、「介護過程展開論Ⅰ」等で用いる学科共通事例をみていく。図8がその共通事例の一部である。この共通事例は、さまざまな科目のなかで同じ事例として取り扱われ、事例学習等で活用される。ただし、この共通事例をそのまま提示しただけでは、ただ単に事例におけるAさんの情報が羅列してあるだけで、科目間連携を意識しづらい状況にある。そこで、科目間連携を意識させる工夫が必要になってくる。

図9は、工夫した後の共通事例である。例えば、事例を把握する上で、現在、Aさんが生活している介護老人福祉施設とは一体どのような施設かを理解しておく必要があるが、それについては「介護総合演習Ⅰ」の実習施設の基本的理解のところで学んだ、ということがわかるよう、吹き出しを使って補足説明した。同様に、家族図については「現代社会と福祉」のファミリーマップの書き方のなかで、生活歴については「介護福祉対象論」の高齢者におけるライフヒストリーの演習のなかで、というように学生にもわかる形で示した。

図10は、前述した共通事例の続きになる。やはり、このままだと科目間連携を意識しづらい。そこで、これについても、図11のように、吹き出しを用いて事例を読み解く上で、科目間連携を意識する工夫を施した。例えば、健康状態については「人体の構造と機能及び疾病」のなかで、車椅子移動については「移動の生活支援Ⅰ」のなかで、総義歯については「身だしなみの生活支援」のなかで、生活環境は「環境の生活支援」のなかで学んだ、ということが一目でわかるようにした。

「介護過程展開論Ⅰ」等で用いる学科共通事例	
氏 名	Aさん
性 別	女性
年 齢	85歳
生活環境	介護老人福祉施設（所在地：長野県A市）
入所年数	1年
入所理由	主たる介護者の娘が、腰痛を患い、家業も忙しいため、Aさんが自ら現在の施設に入所を希望した。
家 族	長女60歳（キーパーソン） 夫と蕎麦店を営む。3年前から腰痛を患う。 月に1回程度、夫婦で面会に訪れる。 長女の子どもたちは県外在住
生活歴	10歳の時、東京から現在のA市に移住。その後、高等女学校、女子師範学校を経て小学校の教師となる。M市の蕎麦店の息子と結婚し、しばらく教師を続けたが、その後辞め、蕎麦店を手伝う。S25年のM市の大火をきっかけにA市に移住し、蕎麦店を続ける。長女夫婦とともに、70歳過ぎまで店を切り盛りした。10年前に脳梗塞で倒れ、自宅で・・・

このままだと科目間連携を意識しにくい⇒工夫が必要だ

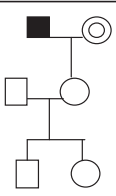


図8 「介護過程展開論Ⅰ」等で用いる学科共通事例①

共通事例で科目間連携を意識する工夫	
氏 名	Aさん
性 別	女性
年 齢	85歳
生活環境	介護老人福祉施設（所在地：長野県A市）
入所年数	<div>「現代社会と福祉」 ファミリーマップ(家族図)の書き方</div>
入所理由	
家 族	<p>長女60歳（キーパーソン） 夫と蕎麦店を営む。3年前から腰痛を患う。月に1回程度、夫婦で面会に訪れる。</p> <p>長女 夫</p>
生活歴	<p>「介護福祉対象論」 高齢者における ライフヒストリーの演習</p> <p>10歳で高等女学校、女子師範学校に進学。その後、高等女学校、女子師範学校卒業。蕎麦店の息子と結婚し、しばらく手伝う。S25年のM市の大火で家を失った。長女夫婦とともに、70歳過ぎまで店を切り盛りした。10年前に脳梗塞で倒れ、自宅で・・・</p>

図9 「介護過程展開論Ⅰ」等で用いる学科共通事例と工夫①

健康状態	<ul style="list-style-type: none"> ・脳梗塞後遺症のため片麻痺 ・糖尿病で1200kcal／日の制限食 ・便秘ぎみで、3～4日排便がないこともある
身体機能	<ul style="list-style-type: none"> ・右片麻痺で下肢筋力低下がみられ、転倒の危険がある。 ・居室内は伝い歩行可能だが、室外は車いす移動 ・小さな字は読めない。 ・発語不明瞭なため、言葉数が少ない。 ・総義歯使用。義歯の手入れは職員が行う。
精神機能	<ul style="list-style-type: none"> ・施設生活にも慣れてきたが、他の利用者との交流は少なく、寂しさを感じている。 ・自分でできることはやろうとする。
生活環境	<ul style="list-style-type: none"> ・居室は個室で、トイレや洗面台がついている。 ・テレビがある。最近、起きている時間はほとんど居室でテレビを見て過ごす。
本人の思い	<ul style="list-style-type: none"> ・「人の役に立ちたい」「多くの人と関わりを持って楽しく過ごしたい」「旅行にも行きたい」「家にも時々帰りたい」 ・「しかし、人に迷惑をかけるから、あきらめている」

図10 「介護過程展開論Ⅰ」等で用いる学科共通事例②

健康 状態	<ul style="list-style-type: none"> ・脳梗塞後遺症のため片麻痺 ・糖尿病 ・便秘ぎみ
身体 機能	<ul style="list-style-type: none"> ・右片麻痺で下肢筋力低下がみられ、転倒の危険がある。 ・居室内は伝い歩行可能だが、室外は車椅子移動 ・小さな字は読めない。 ・発語不明瞭なため、言葉が聞き取れない。 ・総義歯使用。義歯の手入れが苦手。
精神 機能	<ul style="list-style-type: none"> ・施設生活に慣れてきたが、他の利用者との交流は少ない。 ・自己肯定感が低い。
生活 環境	<ul style="list-style-type: none"> ・居室は個室で、トイレや洗面台がついている。 ・テレビ、ラジオ、冷暖房がある。 ・食事、洗濯、掃除は職員が担当。
本人 の思い	<ul style="list-style-type: none"> ・「介護施設で生活するのは、人から見てもらいたくない。」 ・「介護施設で生活するのは、人から見てもらいたくない。」 ・「介護施設で生活するのは、人から見てもらいたくない。」

図 11 「介護過程展開論Ⅰ」等で用いる学科共通事例と工夫②

次に、共通事例とその工夫からの「気づき」→「思考」→「対話」の内容を示す。事例学習の際、他の科目で学んだ知識・技術を活用することができない学生が目立つ。それだけに、学んだ知識・技術の関係性をわかりやすく示す工夫が学生にとっては重要になる。さらに、科目間で共通事例を用いれば、利用者設定も同じになり、紙面上であっても事例をより理解しやすくなるのではなかろうか。

事例を把握する際、学生のなかには利用者の活動や参加といった側面にのみ注目しがちで、いくつかの情報を整理・統合して総合的かつ分析的に事例をとらえようとするのが苦手な人もいる。

例えば、不十分な情報のまま利用者のアセスメントをしてしまい、結果的に利用者が望む生活課題を見出すことができない学生もいる。「歩きたい」がその人の生活課題ではなく、「外出して自分が好きな花を見たい」が生活課題となる場合も考えられる。

また、利用者の健康状態や心身機能も含めて理解していると、移乗介助や排泄介助等、なぜ、そのような介護をするのか、根拠をより説明しやすくなるのではなかろうか。教員には、学生が各科目で学んだ点でしかない知識・技術をつなぐ役割もあると思われる。

V. 考察

以下、本FD活動を通しての考察を4点述べる。

1. 本FD活動の意義と効果

「医療的ケア」等、介護福祉士に求められる仕事内容は高度化・多様化傾向にある。同時にそれは、介護福祉士養成校の学生にも多様な学習機会の提供が必要になってきていることを意味する。こうした状況のなか、科目ごとの授業による学びの限界を克服する意味でも、科目間連携による学習内容の強化・拡大が必要と考えられる。

本FD活動においても、科目間連携の検討を通して、「介護過程」とすでに連携している科目やさらに連携が必要と思われる科目、そしてそれらの授業内容と時期についての確認や新たな気づきにもつながった。ただし、こうした効果がみられたとはいえ、現段階では、「介護過程」と他の科目との連携について、十分に検討できたとはいえない。今後も、今回の取り組みを基盤とし、「介護過程」における科目間連携について継続的に検討していく必要があるといえる。

2. 「介護実習」を核とした科目間連携の重要性

本FD活動を通して、「介護実習」を核に「介護過程」と他科目との連携を促進することの重要性を

確認できた。この学びの成果を「見える化」したのが、図 12 の「介護実習」を核とした科目間連携マップになる。具体的には、「介護」「こころとからだのしくみ」「人間と社会」という 3 つの大きな領域の中心に「介護実習」を配置した。「介護過程」と他科目との連携はもちろん、「介護実習」を中核としながら連携を図り、学びを循環させていくことが重要になってくると考えられる。

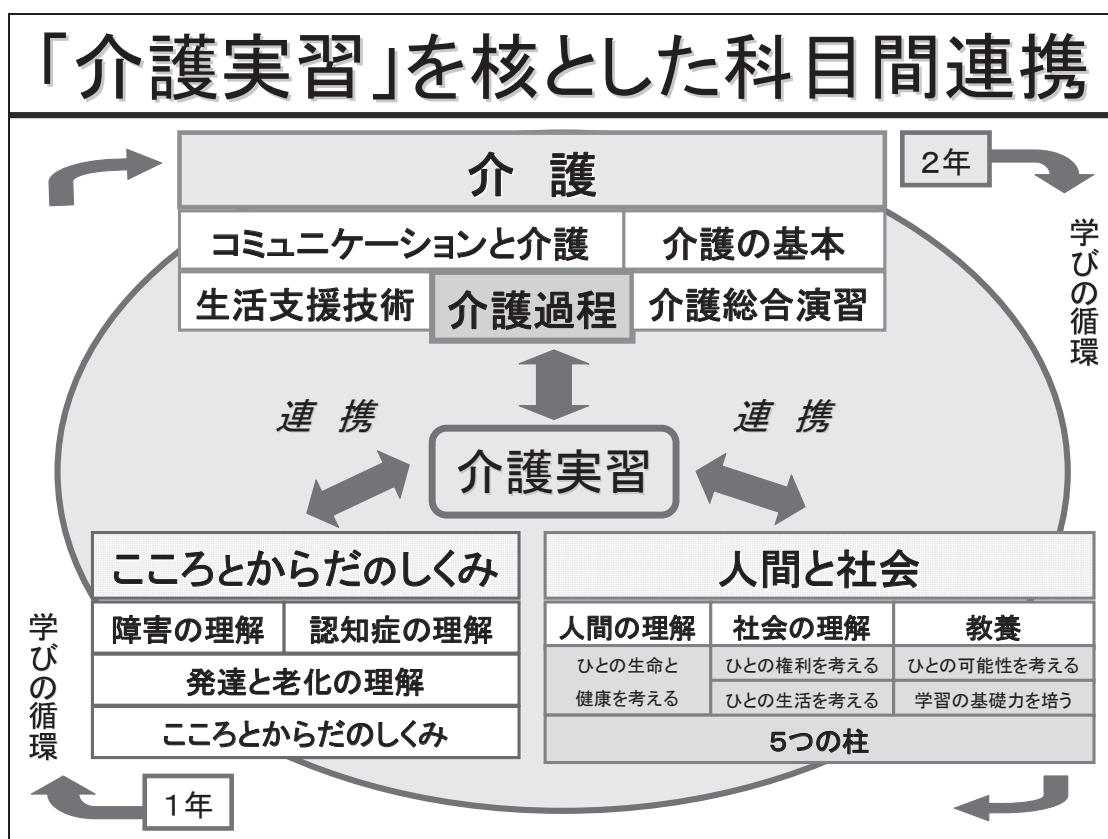


図 12 「介護実習」を核とした科目間連携マップ

3. カリキュラム・マップの必要性

全国の大学 2629 学科への調査（回収数 733、回収率 27.9%）によると、シラバスにおける学習成果の明示や授業 15 回の内容等、大学設置基準に明記されているものについては実施されているが、学科の目標と各授業科目との関連の図表（「カリキュラム・マップ」）を作成しているのは 44.1% で半数以下にとどまったことが報告されている⁷⁾。その一方で、中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（2012）には、学習成果を中心にして教育プログラムを構築することに加え、学習成果の達成にはカリキュラム・マップの作成が不可欠なことが明記されている⁸⁾。

このようにカリキュラム・マップの必要性が指摘されるなか、今回作成した「介護実習」を核とした科目間連携マップ（図 12）は、カリキュラム・マップの基礎と位置づけることも可能である。カリキュ

ラム・マップは、「見える化」を通してカリキュラムの全体像を学生にもわかりやすい形で示すことができ、この科目がカリキュラム全体のなかでどの位置にあるのか、今後、どのような科目を学んでいくのか等、履修する学生の道先案内としての役割も果たすと考えられる。「木を見て森を見ず」という言葉があるように、それぞれの科目だけにとらわれるのではなく、介護福祉士に必要な科目をまず全体的に把握しておくことが学生には求められ、教員にはそれを支援する役目がある。その意味で、「介護実習」を核とした科目間連携マップは、学生の学習支援の一環にもつながると考えられる。

ただし、「介護実習」を核とした科目間連携マップは、カリキュラム・マップとして考えた場合、まだ不十分で発展途上の段階にあるといえる。したがって、今後、図 12 をベースとし、さらに学生が見てもわかりやすい「介護福祉学科カリキュラム・

マップ」へと発展させていく必要がある。

4. 教員に求められるファシリテーターとしての役割

今後、「介護実習」での学生の学びをどう授業に反映させるのか、他の科目との連携のなかで検討して実践していくことが必要と思われる。ただし、その際、教員には学生がもつ知識・技術をつなぐファシリテーター (facilitator) としての役割が求められていると思われる。

ファシリテーターには、人々のアイデアや教育・学習、自己表現等、あらゆる知的創造活動を支援し促進していく役割がある⁹⁾。そのため、ファシリテーターは、①場をつくり・つなげる (場のデザインスキル)、②受け止めて・引き出す (対人関係スキル)、③かみ合わせて・整理する (構造化スキル)、④まとめて・分かち合う (合意形成スキル) といった4つのスキルを駆使していく¹⁰⁾。

例えば、学生がディスカッションする際は、司会進行役の教員が私見を述べず、学生の発言をわかりやすく言い換えて繰り返し、次の学生の発言に結びつける等、うまく相手に伝えられない学生の言葉をフォローアップしていくことが重要になる。

VI. 結論

本FD活動から得られた示唆をまとめると次の3点になる。第1に、「介護過程」についてすでに連携している科目に加え、さらに連携が必要と思われる科目の確認と新たな気づきにつながる。第2に、「介護実習」を核に「介護過程」と他科目との連携を促進することが重要である。そのためには、カリキュラム・マップとして示し、学生の学習支援の一環につなげる必要がある。第3に、教員には、学生がもつ知識・技術をつなぐファシリテーター (facilitator) としての役割もある。

本FD活動から導き出された今後の課題は3点ある。第1に、「介護過程」における科目間連携に加え、他科目における科目間連携についても検討していく必要がある。第2に、「介護実習」を核とした科目間連携マップは、カリキュラム・マップとして考えた場合、まだ発展途上であるため、「介護福祉学科カリキュラム・マップ」へと発展させていく必要がある。第3に、「介護実習」での学生の学びをどう授業に反映させるのか、他の科目との連携のなかでさらに検討・実践していく必要がある。

最後に、今回の科目間連携とその科目間連携を意識する「見える化」の取り組みは、教育目的・目標にはならないことを付け加えておく。なぜなら、科目間連携は、あくまでも基軸となる科目 (今回は「介護過程」を指す) の教育目的・目標を達成するため

の手段の一部だからである¹¹⁾。私たちは、そのことを忘れてはならない。

補注

1) FDは、Faculty Developmentの略である。Facultyは、能力、才能、手腕、学部、教員、教員組織等を意味する。Developmentは、開発、発展、成長等を意味する。

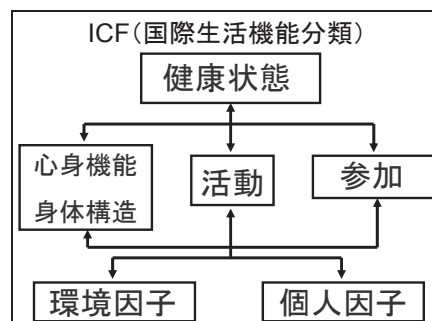
FDとは、「個々の大学教員が所属大学における種々の義務 (教育・研究・管理・社会奉仕等) を達成するために必要な専門的能力を維持し、改善するためのあらゆる方策や活動」 (B.C.Mathis) のことである。

本来は、このように広い概念だが、近年一般には「授業内容の改善」「教える技術や方法の向上」 (狭義のFD) の意味で使われることも多い (一般教育学会：大学教育研究の課題。玉川大学出版部、253, 1997)。

2007年までは大学設置基準において「大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究の実施に努めなければならない」 (第25条の2) とし、FDは努力義務だった。しかし、2008年からは、「…研修及び研究を実施するものとする」と改正され、FD実施は明確な「義務規定」に変更された。

2) ICFは、International Classification of Functioning, Disability and Healthの略で、国際生活機能分類と訳す。2001年5月、WHO (世界保健機関) 総会において採択された。

以下の図にみるように、ICFは、利用者を全体的にとらえるのに適した枠組みで、アセスメントのためのツールでもある。このICFを共通言語とし、チームとして利用者支援に取り組む必要がある (介護福祉士養成講座編集委員会：介護過程。中央法規、2009参照)。



引用文献

- 1) 齋藤真木・尾台安子・合津千香ほか：障害者の外出支援の体験学習の試み，松本短期大学研究紀要，第 21 号：56-57 (2012)．
- 2) 加戸隆介：初年次教育と科目間連携ー地方キャンパスからの提言．北里大学高等教育開発センターニュース，Vol.6：1 (2009)．
- 3) 益田英俊・牧野光則：科目間の連携を考慮したカリキュラムの可視化．電子情報通信学会第 19 回データ工学ワークショップ論文集，1－2 (2008)．
- 4) 井上千津子・尾台安子・松井奈美ほか：新大学社会福祉・介護福祉講座 介護技術論．第一法規，225 (2009)．
- 5) 加藤伸子・河野純大・村上裕史ほか：聴覚障害学生のためのキーワード付き手話通訳映像を用いた情報保障の試み．筑波技術大学テクノレポート，14，：1 (2007)
- 6) 平野隆之：地域福祉推進の理論と方法．有斐閣，9 (2008)．
- 7) 日本私立大学協会付置 私立高等教育研究所プロジェクト：第二回学士課程教育の改革状況と現状認識に関する調査報告書．2，22－23 (2011)．
- 8) 一般財団法人短期大学基準協会：自己点検・評価報告書作成マニュアル．3 (2012. 4 改定)．
- 9) 堀公俊：組織変革ファシリテーター．東洋経済新報社，15 (2006)．
- 10) 堀公俊：組織変革ファシリテーター．東洋経済新報社，218 (2006)．
- 11) 串本剛：学士課程教育をどのように設計するか 事例研究 1 大阪女学院大学 科目間連携による教育目標の実現．リクルートカレッジマネジメント，171：38 (2011)．

参考文献

- 1) 益田英俊・牧野光則：科目間の連携を考慮したカリキュラムの可視化．電子情報通信学会第 19 回データ工学ワークショップ論文集 (2008)．
- 2) 蘆田一郎・今村徹・宮岡洋三：情報機器の活用と科目間連携による授業改善の試み，新潟医療福祉学会誌 (2003)